

[エッセイ No.25 自分を知るとのこと]

私は根気がない。私はナマケモノだ。私は無精である。

このように書くと、「音楽家になったんだからそんなわけない」という人たちがきつと絶対出てくる。でも本当だ。音楽は好きで“楽しい”から続いていた。

私は応用力がない。なので「理数系」にはめっぽう弱い。数学も「語学」のように、書かれているものをただ覚えることしかできなかつたし、してこなかつた。

私はメチャクチャ不器用だ。いつもの社交ダンス教室で、せっかく若い先生がジャズやヒップホップのステップや形を教えてくれるのに、全然真似さえできない。

それでも好奇心はあるし、できないことや知らないことを教えてもらうのは好き。だから恥ずかしいのを覚悟で、懲りずに先生と一緒に鏡の前でステップを踏んでみる。ダンスでもピラティスでも、何か一つでも新しいことを会得すると嬉しくて大満足。単純なのだろう。

「無から有を生み出す」才能は全くない。だから絵を描いたり何かをデザインして創り出したり、音楽でも作曲や即興演奏などは、どんなに勉強して考えたり努力しても無理だとわかつた。こうやって“エッセイのようなもの”を書き留めることはなんとかできても、小説は試し書きさえだめだ。

色々振り返ってみるに、私にはとてもウトイ、無頓着な面がたくさんあることにも(あったことに?!)気づいた。

まず「勝ち負け」に無頓着。一人っ子のせいもあったのか、「競争」とかライバルという意識を感じたことがなかつた。自分の仕事に対して、野心や名誉欲がもう少しないものか、と元夫からはよく呆れられた。

象徴的だったのは、1980年のミュンヘン国際コンクールかもしれない。私はファイナリストになったのだが、一次、二次、三次、と日ごとに合格者の名前が張り出される。この折に私の伴奏を弾いてくれたことで知り合つた元夫は、発表される私の名前に、毎回大変喜んでくれた。そして私の「クールさ」を不思議がった。思い起こすに、私は多分「一番になるためにコンクールを受けた」のではない。ヨーロッパでの勉強の成果の区切り、他の国々の歌い手たちと一緒に過ごす日々(2週間半ほどあった)の楽しさ、すばらしいピアニストと奏でる音楽、それらに満たされていた。そして、自分が“通過”して合格していることより、好きで評価していた仲間がオチたりすることが悲しかった。最後に4位になった時には、悔しがってくれる周りの人たちの中で、私自身は実は「フムフム」…。あまりにも「勝ち負け」に拘らない私は、周りにはもしかしたら理解不可能だったかもしれないし、キャリア向上を目指すにはのんびりし過ぎる人間と映つたかもしれない。

そして幼いころから、いわゆる“女の子っぽい”キラキラ、フリフリした可愛いものには、全然興味がなかった。ついでに言えば、「お金」にも無頓着、というより「お金」の高低を全然理解していなかったようだ。今でも「ブランド物」には全く興味がない。

おいしいものへの“執着”もない。もちろんオイシイにこしたことはないが、それを求めて何時間も並んだりしたくない。

またなんというか、「上からの命令」には、自分できちんと納得するまでは、基本、サカラいたい。(だから、いまだに「オカミ推奨のマイナンバーカード」も持っていない。)

“危険な目”に会っても、結構ジタバタしない。実際、何回かの経験を経て、これは確かに言える。

そして、何よりも「男女の機微」には見事に疎かった。振り返っていくつか例を挙げることもできるが、笑われるばかりだろうし、自分でもあまりの“無粋さ”にかなり恥ずかしくなる。相手方に対してもなんとシツレイな疎さだったろう。

ひとつだけ、自分の“ナイーブさ”をちょっと自慢してみようか。

初めて主役を歌ったオペラ「オテロ」。登場する第一幕で、演出家にほんの形式的な“キスシーンを要求”され、その稽古の後、仲間にそのシーンを“冷やかされて泣いた”、というのは、後々まで結構「伝説」として残っていた。そして最後の第四幕の頭、アリアを歌った後に不安な気持ちのままベッドに入って夫を待つのだが、そこで演出家に笑われた。「アノネ、大きなダブルベッドに入るのに、一人でそんなに真ん中にど〜んと寝る人はいないよ！」その意味は分からなかった…。年齢は言いたくない…。

そして、その作品の稽古中、場に関わっていたありとあらゆる男性たちと噂を立てられた。私はその“事実”を両親に大自慢したものだ！ ああ、ハズカシイ！

私は外国の人たちとコンタクトをとるのが好きだ。日本や日本の友人たちがキライなのではない。こんなに安全で、おいしくて、安心して過ごせる国は恐らく世界中で珍しいし、昔からの友人たちとの心の交流はとても嬉しく有難い。でも、ほとんど50年近く、ということは人生の半分以上を、外国の人たちに囲まれて過ごす環境の中にいた。彼らと一緒にいる生活がまったく「当たり前」の世界だ。そのせいか、ほとんどの時間を日本で過ごしている今は、ちょっと寂しい思いがする。

その分なぜか、日本語が気になる。30年くらい前にさえ、私の話し言葉は「化石の日本語」と言われたが、外国で過ごしていたせいもあって、逆に日本語に敏感にな

ってしまった。

私自身は“気持ち悪い”が、昔からそこここに存在していたらしい「ら抜き言葉」はもうあきらめた。でも誰が始めたのか、インパクトを強めるための、最近流行っている「語尾抜き形容詞」。いつの間にか“正妻”の位置づけになってしまった感がある。

付ければ丁寧になると思われているらしい、どこにでも現れる「様」と「方」。話を続けたい意思を表すために、「思っていて～」で繋げる話し方の風潮……。それに、例えば「寒くない」とか「長くない」などの文のアクセントが、いつの間にか私には発音不可能な抑揚になってしまった。ある時ふと気になったと思ったら、この抑揚はどんどんと広がった。大好きなアナウンサーが、突然その抑揚で話した時のショックといったら！（あ～あ、私はどんどん不寛容になってきてしまったみたい！）

敏感になったついでにもう一つ。歌手としてのサガかもしれないが、若い人たちの「歌う母音」が、平べったくなった。“ア”が“エ”に近くなり、“オ”が“ア”に近くなり、響きがなんだか“甘ったるく”なった。でも実はこれは、30年くらい前ご一緒したことのある八塩圭子アナウンサーが、若い世代のアナウンサーへの指導点として、既に言われていたことでもある。日本人独特の「カワイイ」への傾倒のせいかな？

でもこれらは、「不寛容」というより、せっかくだから、日本語の美しさを大事にしていきたいという気持ちの表れと思ってほしい。外国生活が長かったゆえの思いだ。一つの選択肢として、意識して使っているならいいのだけれど、人生“それ”しか知らずに過ごしていつってしまったら、本当に残念！

と色々「自分解析」を試みたが、一つ思い出した。両親によると、私から「他の人の悪いこと」を聞いたことがない、つまり「人の悪口」を言ったことがないらしい。というか、どこか鈍感なためか、あまり感じなかったのかもしれない。

同じ歌手の分野でも、自分より優れたところ、自分にはできないことばかり“目につく”から、その意味で「羨ましいなあ」と思うことはたくさんある。

だから昨今の、SNSでの「自己主張」や意見投稿などをする人たちの「自信」には、驚愕するばかりだ。自分を相手と比べてみると、感情のままに言葉をぶつける自信も勇気もない。そんなに皆、自分が正しいと公言したいのだろうか。それもある意味羨ましいが、それほど自分の主張に自信があるのなら、きちんと名前を出して言えばいい。なぜ、目の前で相手の目を見て言える言葉で、名乗って話さないのだろう。それならいくらでも「言論の自由」を振りかざす権利もあるというのに。

ヘンなところに行き着いてしまった。悪しからず寛大にご了承のほどを！